

老人保健施設に入所する高齢者の靴使用と生活レベルの関係

新潟医療福祉大学 運動機能プロジェクト研究センター・
阿部薫 江原義弘 小松聡子 田中悠也
介護老人保健施設ヌーベルさんがわ・尾崎民子
徳武産業株式会社・十河孝男

【背景】

筆者らのこれまでの研究¹⁾から、老人保健施設に入所する高齢者は、常用する靴の適合が不良なため、生活レベルが低下していると考えられた。このため靴使用と生活レベルの関係について、①現用の履物調査と足型計測、②調査開始時の生活レベル、③適正な靴の使用を開始し、定期的に歩行能力や生活レベルの経時的変化を調査した。使用する靴以外の生活条件は変えずに、調査開始時の初期評価からどのように変化し、または変化せず、最終評価の結果から適正な靴の使用が生活レベルに変化を与えるのかを検討した。

【方法】

調査にご協力頂いた施設は、香川県の介護老人保健施設「ヌーベルさんがわ」であった。対象者はここに入所している後期高齢者12名を対象とした。選出基準は生活状態が完全に自立している方や、自立歩行が完全に可能な方を除き、移動に何らかの介助や見守りが必要な方を対象とした。調査期間は平成22年10～12月とし、調査項目は足型計測・靴適否の判断から靴の交換・認知度・移動時間・FIM・介護量であった。なお本研究は、新潟医療福祉大学倫理委員会に研究倫理申請を行い、承認許可(第17223号)を得て行われた。

【結果】

1. 生活レベル(機能的自立度指標:FIM)

対象者の方の足型計測を行い、現用の履物の適合をチェックした。その結果、2cm大きい靴を使用している方が6名、1cm大きい方は3名、適切と判断されたのは3名であった。なおスリッパを常用されている方には、靴を使用して頂くことにした。生活のレベルの評価として機能的自立度指標(FIM)を用いて調査したが、各月とも変化は認められなかった。

2. 靴の使用状態

靴はご自分の居室のベッドの下、またはすぐそばに保管していた。12名中9名が大きめの靴を使用していたため、平成22年10月から対象者すべてに、適合した靴を使用させた。

3. 下肢の浮腫

適合した靴を常用させることにより、下肢の浮腫が改善された。足幅・足囲・ウエストガース・インステップガース・足首の周径が縮小し、統計的有意差が認められた。なお、ふくらはぎには有意差が認められなかった。

4. 移動の方法

ベッド脇で靴を履き、そして立ち上がり、各々の移動形式となる。移動の方法は、車いす自走9名、歩行器使用1名、

老人車使用1名、T字杖使用1名であった。

5. 移動時間

日常生活の中における実際の移動時間を計測するため、あえてスタートラインなどを設けて計測場面を設定するのではなく、施設の介護員がご本人に知られないようにし、ストップウォッチで5mの移動時間を計測した。月別の計測では、移動時間は確実に速くなっており、統計的有意差が認められた。

6. 認知度(長谷川式簡易知能評価スケール)

長谷川式簡易知能評価スケールによって、靴交換の前後の点数推移を月別に検討した。点数は減少傾向であったが、統計的有意差は認められなかった。

7. 結果(介護度・介護員のコメント)

介護保険で使用される介護レベルによる分類では、要介護1が1名、要介護2が6名、要介護3が1名、要介護4が4名となっていたが、今回の調査対象期間では変化は認められなかった。また介護担当職員のコメントによれば、数値には出て来ないが介護量は確実に減少してきており、特に踏み立てがしっかりしてきたことが挙げられた。

【考察】

生活レベル(機能的自立度指標:FIM)に変化がなかったことについては、調査期間が3ヶ月と短期間であったため、点数に反映される行動に顕著な効果を及ぼすことがなかったと考えられた。

大きめの靴を使用されている方が多かった理由として、家族が靴を購入する際に、「大は小を兼ねる」といった選択をされていたり、ご本人がスリッパ感覚で大きめの靴を履きたい、脱ぎ履きが楽、と考えているものと推察された。

下肢の浮腫が改善されたことについては、適合した靴によって日常生活の活動度が向上してきたためと考えられた。

移動時間が速くなってきたことは、適合した靴使用による顕著な効果であると考えられた。

認知度の変化に有意差が認められなかったのは、調査期間が3ヶ月と短期間であり、劇的な効果を確認できないものであると考えられた。

介護度の認定レベルを変更するには至らなかったが、介護員のコメントによれば、日常生活における改善が指摘されており、適正な靴の長期間使用によって、さらに改善することが示唆された。

【結語】

靴以外の生活条件を変えず、適合した靴を使用して頂いた結果、特に浮腫の改善が顕著で、移動時間が速く改善し、認知度に関しては現状維持が改善傾向にあった。

【文献】

- 1) 阿部薫ほか. 後期高齢者におけるケアシューズの適合性と靴歩行特性. 靴の医学. 2009; 23: 81-85.

本研究の一部は、平成22年度新潟医療福祉大学研究奨励金(B発展的研究)の助成を受けて行われた。